

法華取要抄の研究

上 田 本 昌

一

宗祖が龍之口から佐渡を経て身延入山をなさるまでの一時期は、其の思想的展開の上にも大きな影響を与へたものがあると考へられる。即ち「法華經の行者」としての佐前から「佛使上行」としての佐後へ、次々に推移せんとせし段階にあつた時で、精神的にも亦思想的にも極めてデリケートな時期であつたと言へるのである。

今、此の宗祖の佐前から佐後に至る思想的展開に就いての一端を観察せんと試みる者であるが、此処では先ず開目・本尊の両抄に於ける開顯が終られた直後、佐渡に於て草稿を作り身延入山の後に完成された御書にして、然も五大部について重要な著作の一つと言はれている法華取要抄を中心として、其の他の重要御書との関連の上に、これを考察してゆこうとするものである。

最初に法華取要抄の成立年時、及び著作の場所に就いて見るならば、これは真蹟に何等の記述がないために古來から①文永九年五月佐渡に於ての述作とする説、或は②文永十一年正月二十四日同じく佐渡に於ての述作とする説、或は又③同年五月二十四日身延にて著すとする説、等と色々な説が述べられてゐるが現在では佐渡に於て其の草案をねり、身延入山の直後文永十一年五月二十四日に本抄の述作宗了をみたとするのが通説となつてゐるようである。また此の御書を受けた対告衆が富木氏であるとする説に就いても、一般に異論のないものゝ如くである。

次ぎに本抄の真蹟に就いて見るならば、其の二十四紙全編が現在中山法華經寺に保存されてをり、また其の草稿は曾て身延山に保存されていたが焼失されて今は無く、更に写本の主なものには、白蓮日興師の筆に依るものが現に富士の大石寺に在り、御書としては少々短篇の部に属するのであるが其の系譜は極めて明確にして、かつ教義内容の面に亘つて見る時は最も主要な御書の部類に属するものである、と言つて敢へて過言ではなからう。

二

然して、本抄の内容に就いて最初に一応の觀察を試みるならば、先ず開卷に、華嚴・法相・三論・真言・禪宗・等を始め、其の他の諸宗の教判を挙げ、おの／＼自家の依經を才一なりと謬見する人師をして、あたかも守株待兔の偏學となし其の非を指すると同時に、法華經法師品の己今当の三説超過を以て將しく法華經のみ佛の正言となし、本宗教判の独自なるを示しているのである。

即ち「今法華經ト与相スルニ對諸經ト超スルニ過スルニ一代ニ廿種有リ之」④と述べ、一切經と法華經との權實相對をおこない、以て法華最勝説を主張しておられるのであり、更に其の中心をなす法門として寿量品の久遠実成を挙げ、久成釈尊と諸佛とを對比して

当世日本国、一切衆生、待ツ彌陀、来迎ヲ者譬ヘ如下牛子含メ馬乳ヲ瓦鏡浮ルカ天月上ヲ。乃至、諸佛如来或ハ十劫百劫千劫已来、過去、佛也、教主釈尊、既ハ五百塵点劫已来、妙覺果滿佛、大日如来阿彌陀如来藥師如来等、尽ル十方諸佛我等本師教主釈尊所從等也、天月萬水浮是也。（定遺八一二）

として此処に法華最勝を説示すると同時に、寿量品の教主釈尊をもつて此土有縁の救済主となし、これに依らざる諸

經を無縁の権經とし迹佛と貶するのである。爰に於て注目すべきことは是の如く諸宗を対破している点に就いてであるが、この破邪の方法に於ても自と佐渡前後に於ける次第があり、最初佐前には浄土・念佛の二宗を漸々に破折し、順次に禪・律等に至るのであつて、教判も専ら権実判に中心が置かれた様であるが、佐渡を経て身延時代に至るや法門の極めて複雑な真言宗と、本宗にとつて特に密接な關係を持つ天台宗等に及び、教判も又権実判から本迹判へ、更には教觀相對へと進展して行く傾向を辿るのであるが、いま此処に於ても既に真言の教判を破し、これに加へ本迹判をもつて諸宗の迹佛を破しているは、佐前の傾向より一步進んだものであると考へられ得るのであり、同時にこれは亦前述の如く教理的に關係の深い天台や、最も巧妙な法門として知られる真言等を其の対照とする佐後の破邪に於ける定石を踏んだものとも見られるのであり、此の取要抄の一段は佐渡から身延時代に入らんとする宗祖の破邪顯正の上に、一進展の足跡を印したものであると言ふことが出来よう。

次ぎに正宗分に於ては、法華經の末法為正説を論じてをり本迹共に末法今時の衆生の為に説かれしものとして

壽量品云是好良藥今留在此等云云、文心者上似説過去事樣以此文案之滅後為本、乃至、諸病之中

謗法華經一重病也、諸藥之中南無妙法蓮華經一良藥也。(八一四)と説いて「是好良藥」の文に寄せ壽量

文底の妙法五字をもつて、末法為正の良藥となしてゐるのである。斯くて本抄の中心たる取要の法体を明かすに、先ず順縁の為に三大秘法の名目を掲げ、續いて逆縁の為に妙法五字の題目をもつてこれにあてゝゐるのであり、

日蓮捨三略二好三肝要二所謂上行菩薩所傳妙法蓮華經五字也……佛既入三宝塔二佛竝座分身來集召三出地涌二取

肝要二當三末代二授三与五字二當世不可有異義。(八一六)

として神力品別付の要法たる五字こそ法華一經に於ける取要の法体となし、又此の五字は必ず本化に依つて末法に弘

布さるべき旨を示されているのであり、即ち最後流通分に於て天変地天の現証による三秘流布の前相を述べ、其の疑い無きを説いているのである。

以下、本抄と特に関係の深いものがあると思はれる他の御書との関連において、逐次其の内容に於ける発展の段階を考察せんと思う。

三

先ず最初に本尊抄と取要抄との関係に就いて觀察を行い、續いて曾谷書・報恩抄・三大秘法抄・撰時抄・等の主要御書との関係及び比較を試みよう。

才一に本尊抄は言う迄もなく文永十一年四月佐渡一ノ谷での撰述であるから、取要抄よりも丁度一年前に著されていることが知れる。いま本尊抄の構成を概略的に見るならば、始め序分に於て天台の正觀章を引用し一念三千の典拠を挙げて、これを解釈し、續いて正宗分に入り題目の実義と本尊の相貌とを明し、流通分にて末法に弘まるべき『教』と『師』とに就いて述べているのであるが、この本尊抄の流通分こそは將しく取要抄の中心に當るもので、即ち本尊抄の才二十三問答から三十番問答に至る流通分は末法流通の教体たる妙法五字を詮顯し、更にそれを弘通するところの導師を決せられし一段にして、蓋し宗祖当身の問題を扱つたものと言へるのであるが、然し爰に現れた宗祖の自覺思想は極めて、暗示的であつて、此の思想を更に詳しく説示したのが取要抄であり曾谷書等であると考へられる。即ち「本門四依地涌千界末法始^ハ必^ニ出^ス現^ス、今遣使還告地涌也」⑤として遣使還告の文に寄せて佛使としての立場を暗に仄めかされているが、これは後の撰時抄に於て明確に「佛の御使」と顯示し、右の文よりも遙かに積極的なもの

と言へるが、今この取要抄に於てもこれに就いて末法為正説をとく中に、自讃の形式をもつて触れている。即ち

問曰法華經為誰人説之乎、答曰……以滅後論之正法一千年・像法一千年・傍也、以末法為正末法中以日蓮為正也……日蓮為正文如何、答曰有諸無智人惡口罵詈等及加刀杖者等云云。(八一三)

これによつて最初に明らかな如く、法華經を説かれし所以は正しく末法の導師たる宗祖自身の為なることを示すと同時に、今や佛使としての自覺をもつて此処に法華一經悉くこれ末法の正師たる宗祖自身をもつて正と為すとの開顯に及べたのである。然し此処に於ても宗祖は本化の自覺を内に秘めて文上には現されてはいないが、明らかに宗祖当身の大事とすべき所であつて、次ぎに「喜余身故難堪自讃也」とあるは将しく「佛使」としての心中の法悦を披瀝されたものと言へよう。

然してこの取要抄にして説く法華末法為正説に就いては、本尊抄のそれとほぼ同様にして構成上にも大差はないが、本尊抄はあくまで「本門の本尊」を説くことに重点が置かれたのに対し、取要抄は三秘に就いての名目を挙げて問云如来滅後二千余年竜樹・天親・天台・伝教所殘秘法何物乎、答曰本門本尊与三戒壇与三題目五字也。(八一五)

と述べ、就中、題目の五字に就いて論じ逆縁下種の要法たるを明している。即ち

為逆縁但限妙法蓮華經五字耳。……所謂上行菩薩所伝妙法蓮華經五字也。乃至佛既入宝塔二佛竝座分身来集召ニ出地涌ニ取三肝要ニ当三末代一授与五字ニ当世不可有異義。(八一六)

此処に取要五字の末法流布を示すと同時に、地涌の当世出現を説いているが、これは前掲の自讃の文と照し合せて見る時は正しく宗祖当身の大事としてクローズ・アツプされて来るのである。

また更に注目すべきことは、此処に示す三大秘法の名目が御書中で最初に完全な三秘各別の形をとつて顕されたものであるとされていることである。然しあくまで三秘の名目を挙げただけに留り具体的な内容の説明に就いては後の報恩抄及び三大秘法抄等に譲り、即ち此等の御書の先駆をなしたものと云へよう。今これを本尊抄と比較するならば取要抄の末文に

如^レ是^ク乱^レ国土^ニ後出^ニ現^シ上行等^ノ聖人^ニ本門^ノ三^ツ法門^ノ建^ニ立^シ之一^ヲ四天四海一同^ニ妙法蓮華經^ノ廣宣流布無^キ疑者歟。(八一
八)

とあつて、これは本尊抄の同じく末文に述べられているところの

經云^ニ猶多怨嫉況滅度後^ト乃至此時地涌千界出現^{シテ}本門^ノ釈尊^ノ為^ニ脇士^ト一闍浮提第一^ノ本尊^ノ可^レ立^ツ此^ニ国^ニ。(七二〇)

との文と相似するのであるが、前者は三秘に亘るも、後者は本尊の広布に限り、此の点に両者の異りを認めるものであつて、即ち取要抄の三秘広布は本尊抄の本尊広布に比して一歩前進した表現と考へられるのであり、所謂本尊から三秘への展開が窺れるわけである。この故に取要抄をして「本尊抄を中心とする佐渡後期の思想から一歩進展した足跡を示すもの」⑥といはれる所以もまた此処に存するものと考へられよう。

次ぎに取要抄の⑦翌年（文永十二年）の三月に著されし曾谷入道御書との関係を見るに、この御書は末法の『正師』と『機根』とに就いて述べてをり、取要抄の正宗分及び流通分と極めて深い関係を持ち、亦本尊抄流通分の後半を更に詳説しているものであると言へるのである。即ち内容に就いて見るならば

爾時大覺世尊演^ニ說^シ壽量品^ヲ然後示^ニ現^{シテ}於十神力^ヲ付^ニ屬^{シタマフ}於四大菩薩^ニ其所屬^ノ之法何物乎、法華經之中捨^ニ廣取^ヲ略捨^ヲ略取^ヲ所謂妙法蓮華經之五字名体宗用教五重玄也。(九〇二)

とありこれは前掲の取要抄の文と同様にして取要の五字を明しているがこれを同時に本化付属の法体として五重玄具足の五字とするは、取要抄より更に一步を進めた表現といへる。然し後段に至つて上行出現の前相として種々の天変地天を挙げ、仁王經等の証を示しているが、取要抄ではこれを三大秘法の今世に弘通さるべき先相と見ている。即ち曾谷書では末法此土に地涌の出現を示すに瑜伽論を始め、伝教の秀句・守護国界章等の文を引き法華一乘の弘まるべき時期は正しく現在なることを説き、其の下に「而予非^ニ地涌^一一分^ニ兼知^ニ此事^一、故前^ニ立^ニ地涌^一之大士^ニ粗示^ニ五字^一」⑧として上行の先駈たる事を述べ、續いて前述の經証と現証によせて「今以^ニ此龜鏡^一浮^ニ見^ニ日本^一、必有^ニ法華^一經大行者歟」といつている。この文は多少暗示的であるが宗祖自身本化上行としての立場を示されたものと言へよう。即ちこの文を取要抄の「日蓮為正」の文と読み合せて見る時、一層其の感を強くする事が出来るのである。

これを要するに曾谷書では取要抄の如く三秘に就いては触れていないが、主として一秘妙法の五字をもつて専ら逆縁下種を説き⑨、五義の中の『師』を究明するに中心が置かれてをり、開日本尊の両抄より取要抄を経て逐次進展し來たれる自覺の一面が窺れるのである。

四

取要抄に於て其の名目を顯した三秘は報恩抄を経て三大秘法抄に至り、其の内容を完全に開顯されているのであつて即ち取要抄では三秘の名を挙げてはいても何等その内容に就いては説明が為されてはおらず、只単に「本門・本尊・与^ニ戒壇^一与^ニ題目^一五字^一也」とあるだけでこれ迄の『三大事』⑩或は『三大秘法』⑪と其の総称だけで呼ばれて來たのに對し、進んで本尊・題目・戒壇の名を連ねているに留まる。尙を三秘に就いては取要抄より約四ヶ月前に著されし法華

行者值難事の追申に「本門本尊与三四菩薩戒壇南無妙法蓮華經」五字^⑫とあり、大体に於て三秘の名目を奉げてはいるが本尊・題目・戒壇と明確に示されたのは取要抄が最初であるとされている。

然してこの取要抄に於ける三大秘法の名目は、二年後（建治二年）の報恩抄にて

問云、天台伝教の弘通し給ざる正法ありや。答云有。求云何物乎。答云三あり。……一は日本乃至一閻浮提一同に本門の教主釈尊を本尊とすべし、所謂宝塔の内の釈迦多宝外の諸佛、竝に上行等の菩薩脇士となるべし。二には本門の戒壇。三には日本乃至漢土月氏一閻浮提に人ごとくに有智無智をきはらず、一同に他事をすてて南無妙法蓮華經と唱ふべし。（一二四八）

としてやゝ具体的に述べ取要抄の文より遙かに進展してはいるが、やはり概略的にして特に戒壇と題目とは其の名目を挙げてゐるに過ぎず、三秘の全体に渡つての明細な解釈を与へた御書としては、宗祖入滅の前年に著されし三大秘法抄が最も代表的なものの一つであると言はれてゐる。

即ち⑬三大秘法抄では開卷壁頭に神力品の四句要法を引用し、其の所説要言の法とは壽量品の三大秘法なりとしてこの下に三秘の各々に就いて詳細な説明がなされてゐる。

三大秘法其体如何、答云予已心大事不^レ如^レ之汝志無^二一^{ナレハ}少言^シ之、壽量品所^ニ建立^ス一本尊者五百塵点、当初以来此土有縁深厚本有無作三身教主釈尊是也。（一八六四）

先ず本門の本尊に就いて詳説し、壽量品及び文句の疏を引いて無作三身の本尊実体を論じてゐる。これは先きの報恩抄で本尊の容貌を示し其のなかば形式論的なるに對して、あくまで実体論的であると言へるのであり、更に本尊抄の場合も報恩抄の形式論を一層具体的に述べたものであつて、所謂大曼荼羅の形に約して本尊の形式を説き、其の実体

に就いては僅に『本門壽量品本尊』又は『壽量品佛』として実体名を出すと雖も、三秘抄の如く無作三身の實體に就いての説明はなされていないものの如くである。次ぎに

題目者有^{トハ}二意^リ、所謂正像与^ト末法^ニ也。……今日蓮が所^ソ唱^ン題目異^{ハナリ}前代^ニ五^{リテ}自行化他^ニ南無妙法蓮華經也、名体宗用教五重玄^ノ五字也。(同上)

として正像理行の題目と末法自行化他の題目とに分ち、更に今の題目を五重玄具足の五字とするのであるが、この五重玄の文は既に前の曾谷書に於て取要の法体を論ずる段で述べられてをり、此処では三秘の中『本門の題目』を釈する為に述べられているのである。然してこれは報恩抄が単に妙法の題目を挙げているのに対し、進んで其の説明に及んでをり題目の二意を明らかにされている。又次ぎに

戒壇^{トハ}者王法^ニ冥^シ佛法^ニ合^ニ王法^ニ王臣一同に本門三^{シテ}大秘密の法を持^チて、……

尋^テ下^{タラン}似^ニ靈山淨土^ニ最勝^ノ地^ニ可^レ建^キ立^ニ戒壇^ニ者歟、可^レ待^ツ時^ヲ耳、事の戒法と申は是也。(同上)

戒壇に就いては王佛冥合と三秘受持とを明し、具体的に戒壇建立の地を示してをり、更にこの事の戒壇建立の際は延暦寺の理戒は無益なりと貶しているのである。然して、爰に於て本門の三大秘法は悉く其の實體が審にされたのであつて、所謂取要抄に端を発した三秘の名目は、報恩抄を経て暫時展開し来たり、今この三秘抄に於て其の全貌を最も具体的に開顯せられたものと言へるのである。

次ぎに復、自覚の問題に就いて見るならば取要抄の翌建治元年六月の述作たる撰時抄との関係を見ることによつて其の展開の跡が知れ得るのである。即ち撰時抄では曾谷書と同じく逆縁下種の一秘妙法を説いて三秘に触れていないが、其の代りに末法弘通の佛使出現を強調し、佛使は宗祖自身たることを明らかにしている。すなはち

後五百歳に一切の仏滅せん時、上行菩薩に妙法華蓮經の五字をもたらしめて謗法一闡提の白癩病の輩の良薬とせんと、……此事一定ならば鬪諍堅固の時、日本国の王臣と竝に萬民等が、仏の御使として南無妙法蓮華經を流布せんとするを、或は罵詈し或は惡口し或流罪し或打擲し、弟子眷屬等を種々の難にあわする人々いかでか安穩にては候べき。(一〇一七)

とある如く、先ず上行付屬の妙法を宗祖自身「仏の御使」として流布せんとすることを明らかに説示してをり、佛使自覺の開顯は爰に於て從來の如き暗示的表現の域を漸く脱したかの如き感じを与へるものと言へるのであつて、更にこの下に

法華經をひろむる者は日本国の一切衆生の父母なり、章安大師云為^ミ彼除^ハ惡^ヲ即是彼親^{ナリ}等云云。されば日蓮は当帝の父母、念佛者・禪宗・真言師等が師範なり、又主君なり。(一〇一八)

とあつて、開目抄の三徳に約し佛使上行としての宗祖は又同時に三徳兼備の導師にして一切衆生の尊敬すべき、末法唯一の救済者たる事を明確に披瀝されているのである。従つてかゝる佛使日蓮に対し迫害を加へる日本国の一切衆生は必ず難に値うものと為し、然もそれが事實として現れたのが正嘉の大地震であり又文永の大慧星等がそれであるとして、天変地天を佛使出現の前相と見た本尊抄や曾谷書等と比するに、これは佛使としての本化の宗祖を迫害する結果と見てをり、遙かに積極的な文にして此の間の自覺に關する推移の跡を窺う事が出来るのである。更にまた

日蓮法華經の行者ならずば、いかなる者の一乗の持者にてはあるべきぞ、……日蓮は閻浮提才一の法華經の行者なり。(一〇一九)

とある文は「日蓮なくば誰をか法華經の行者として佛語をたすけん、乃至我身法華經の行者にあらざるか。」⑭と説

く開目抄の文より一段と深く「法華經の大行者」とする曾谷書の文、並びに「日蓮為正」と説く取要抄の文に相当する所であるが、然しこれらは単に「法華經の行者」とするに對して、撰時抄はあく迄「佛の御使としての法華經の行者」として更に進歩した表現であり、宗祖の自覺思想の上に一つの歸結を与へたものであると言ふことが出来る。尙、自覺の表現上に於ける過程に就いては、古來開目抄をもつて人開顯となしている所であるが、開目抄は終始法華經の行者を表として、宗祖自身これ迄の弘通を回顧し經文との符合に於いてこれを主張してをられ、また本尊抄では「地涌千界末法始必可ニ出現^{ハス}、今遣使還告地涌也^{ハス}。」との文によせて、佛使たるを示さんとするものであるが何れも暗示的な域を出ず本化上行の仏使たる事は悉く其の文底に秘して、明白な文上表現を避けられてをり、撰時抄の如く『佛使』たることを明確に説示されていないものゝ如くである。

五

斯くして上來、法華取要抄を中心として宗祖の佐渡から身延に至る間の思想的展開と、表現上に於ける推移の一端を、主として本門の三大秘法と佛使自覺との上から考察して來たのであるが、これを要するに取要抄では宗祖の三秘思想に對し其の發端的地位を占めると同時に、法華一經の肝要たる妙法五字の要法をもつて逆縁下種の法体となし、更に順縁の為に三秘の名目を掲げてをり、即ち三秘思想の展開に於て佐渡から身延への推移を物語る最初のキイ・ポイントとして、蓋し不可飲の御書と言はなければならないであろう。更に又、自覺思想の表現上に於ける過程に就いて見ても知れる如く、最初に法華經の行者に非ざるかとの疑問提示の形式による開目抄から、本化の出現すべき經文・論釈によつて其の国土、時期、機根を挙げ、天変地天の現象をもつて本化出現の先兆となし、自身の仏使たるを暗示

的に仄めかされた本尊抄を経て、法華一經悉く末法の導師たる宗祖自身の為に説かれしものとして、上行所伝取要の五字を弘通せんとする事をあかせし取要抄に至り、本化の出現と三秘の流布を説き本尊抄のそれと相似しつゝも、尙三秘の名目を連ねし所に一步の進展を見るべきであらう。また更に地涌に先立ちて五字を弘通せんとする曾谷書に及び逐次『佛使』としての論究が續けられついに撰時抄で示す如く、「佛の御使として」と説顯されるに至たのである。即ち取要抄は自覺の問題に就いては撰時抄の如く明確な態度は示していないが、然し開目・本尊兩抄の様に全く暗示的な言はば文底表現とも異り、その中には一種の積極的な表現をなす素因を秘めているとも言へるのであつて、換言せば此処に宗祖の佐渡から身延への思想的展開を窺うことが出来るものと言へよう。

然して取要抄は前述の如く、法華一部末法為正説及び本化上行出現の瑞相等と主として本尊抄の流通文と内容の上で密接な關係を持つのであるが、更に取要抄の序分で法師品の己・今・当の説を用い、權實相對をなし法華最勝説を示すのは、開目抄の五重相對と相似する所であるが、勿論權實判に留ることなく「於末法者大・小・權・實・顯・密・共有」教無得道」として究極は、所謂上行菩薩所傳の妙法五字をもつて取要の法体となすのであり、此の一秘妙法と本門の三大秘法及び此等の法門を末法に弘むべき佛使上行の出現とを述べ、以て一抄を結ばれているのである。即ち

出_ニ現_シ上行等聖人_ノ、本門三法門建_ニ立_シ之_一

と、別して上行の出現とそれによつて建立される本門の三秘を挙げ、次ぎに

一四天四海一同妙法蓮華經_ノ、廣宣布無_キ疑_ヒ者歟。

と述べ、総じて一秘妙法の広布を示せるは、明らかに三秘即一秘の理を顯示したものと解し得るのであるが、亦同時

に此の三秘即一秘の妙法五字を末法に於いて、佛説の如く弘通されし導師は宗祖一人なることから見ても、此処で言う「上行等の聖人」とは将しく宗祖以外にないことが知れるのである。

以上、極めて概略的な考察ではあつたがこの取要抄の持つ意義は、佐渡の流罪生活から身延の隠棲生活に移る間の言はば過渡期に於ける述作であるだけに、其の思想内容に就いて見ても、或は表現様式の推移を知る上からも極めて重要なポストを占むる御書であることが知れるのであり、就中、右の觀察による開目・本尊の両抄を始めとして、其の他の主要御書との関連を辿りつゝ、三大秘法と本化自覺との二面に亘つて、其の思想的展開及び表現形式の推移に就いて大略ながらアウトラインの一端を、ほど探らんと試みたものである。

『註』

- (1) 文永九年説は綱要導師の刪略に「是在島之撰^{ナラン}也」として此の説を立つ。
- (2) 啓蒙講師は文永十一年正月説を立つ。
- (3) 同十一年五月説は日興師の御書新目録。
- (4) 取要抄 定遺第一卷 八一二頁
- (5) 本尊抄 定遺第一卷 七一六頁
- (6) 祖書講義第七卷(鈴木一成師) 九九頁
- (7) 文永十二年は四月に建治元年と改元。
- (8) 曾谷書 定遺第一卷 九一〇頁
- (9) 曾谷書に云く「大覺世尊以三佛眼三鑒三知於末法爲令三対三治此逆謗三罪三留三置於一大秘法」(九〇〇)
- (10) 四条書 定遺第一卷 六三五頁

(11) 義淨房御書 同 七三〇頁

(12) 法華行者值難事 同 七九八頁

(13) 三大祕法抄は真為未決とされているが今は本尊・曾谷・三祕の三抄の内容・構成から見ても、この三抄が極めて密接な関係を保っている点から、三祕抄を真蹟に近いものとする鈴木一成師の説に従う。

(14) 開目抄定遺第一卷五六〇頁